

Ⅲ 継承 ～ Inheritance ～

校歌に込められ 受け継がれてきた先人の教育理念を「いま」と「これから」に繋ぐ

鳥沼小学校校歌

本校の校歌は隠れもしない歌人にして初代校長、小田観蛭氏の詞によるものである。氏は10年にわたって本校教育の基礎を築かれ、長年温められた教育の理想を慎重に作詞され、校歌として書き贈られたのである。

当時、すでに地域は開発整備を終了し、鳥沼公園の一郭に、世の厳しい現実にも耐える子どもたちのための国の子寮が建てられて7年目となり、世間の耳目を集めていた。故にこの校歌はひとり作詞者観蛭氏の理想だけではなく、学校と地域挙げての理想であり、真に鳥沼小学校の象徴として生まれたといつてよい。

「希望に燃える鳥沼の子ども」と謳われてきた「希望」とは、時代や社会の相違、また個人の生い立ちや境涯を超越し、一人一人をその願いに向かわせる営みを表す。そのねらいは、本校に通う子どもがそれぞれに自分を生かす希望をもち、それを支えとして明るく粘り強く、月々年々に主体的に自らの問題を解決でき、豊かな生活力を養い、人と円滑に協調していける立派な社会人へと成長することにある。また、「もえる」とは一人一人の不公平とも思えるような厳しさにも耐えて、根気強く堂々と自ら励み抜くこと、さらに「鳥沼の子」とは、心にしみる鳥沼の自然と、学校の温かい伝統に親しみ、地域の人々をはじめ、誰からも信頼される大事な一人であることを踏まえて誇りをもつことを希求したものである。

[昭和63年度学校経営計画より抜粋・改]

継承するゴール

学習指導要領前文の一節には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」と記されている。校歌に込められた先人の思いは、百余年を経て、なお時の教育施策と合致をみているのである。このことを、本校の目指す教育の究極（＝継承するゴール）とおさえてイメージコンセプトを定めた。

本校が紡いできた歴史、紡いでいく歴史の一端を担う責任を自覚し、地域社会の付託に応えるため、「希望にもえる鳥沼の子ども」が体現された姿を、「ひとみはつねに かがやかし」の歌詞を受け「かがやくひとみ」と定めた。さらに、そこに連なる確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成についても、歌詞をもとに構成した。

《継承するゴール（コンセプト）》

かがやくひとみ

～希望にもえる鳥沼の子ども～

- 【あたまづくり】 進んでちしきをみがく子
- 【こころづくり】 けがれぬこころをもつ子
- 【からだづくり】 たゆまず体(たい)を練る子

Ⅲ 創造

～ Creation ～

来る時代の変化を捉え、子どもたちに社会を担う“智慧”を育む

めざす学校像

学校は、未来を創り、未来を担う児童に、社会との関わりのもとで自己実現を果たす力を育む場所である。言うなれば、学校の存在意義は、将来を心に描き、社会と繋がり、人と共に高め合う術を体得させることにある。

質の高い教育を社会と共に創り上げ、成果を分かち合う営みの積み重ねは、よりよい学校づくりの王道であり、本校を“個々の教師力・学校の組織力・社会の教育力”を結集した“真の学校力”を備えた学びの場とするために、あるべき姿を次のようにおさえる。

■子どもにとって

[人と高め合う喜びを実感できる学校]

学校は 子どもどうしが安心感をもってつながり
互いのよさを確かめ合い 学び続けるところです

■教職員にとって

[人を育む誇りをもてる学校]

学校は 専門職の資質と矜持を備えた実践者が集い
協力し合って子どもを育むところです

■保護者と地域にとって

[人を育む重さを共に担う学校]

学校は 大人どうしがパートナーとして力を合わせ
子どもの成長の喜びを分かち合うところです。

経営の基軸

人を育む場である学校には、組織マネジメントにおいても“問題志向”をベースとする経済分野（製造物の不具合を洗い出し、品質管理や顧客満足度の向上につなげる）、或いは医療分野（患部を特定して除去し、健康を回復させる）とは異なる発想と手立てが求められる。

教育（学校）をマネジメントするとは、校内外のひと・こと・もののリソース（教育資源）を重点目標の具現化につながるよう活用する「リソース・マネジメント」を実践することである。

そのためには、教職員間のコミュニケーションのもとで、実践のゴール（意義や目的）と手立てが共有されていなければならない。また、児童の変化（小さな成長）を見取り、成果として共有するためには、教職員間においても互いの変化（資質の向上）や成果（優れた実践）を認め合う職場風土の醸成が不可欠である。

そこで、別項の通り“解決志向（ソリューション）”の発想による「教育マネジメントサイクル」を整え、学校づくり・学級づくり・授業づくりの背骨～学校経営の基軸に据える。

但し、学校事故等、児童の生命・安全に関わることについては、このサイクルに依らず、問題志向の発想に立って原因究明を行い、再発防止策を講じる。（参照：経営7項）

創造するゴール

シンギュラリティ（AIが人知を凌駕する日）の訪れは、決して遠い未来ではない。その時代にあっては、知識の蓄積は主にコンピュータが担い、人は知っていることを活用してどのようなことをすべきかを判断し、実行に移す役割を担うと言われる。現在在籍する児童は、まさにそうした時代の直接の担い手となる。

かつて富良野塾主宰 倉本 聡氏は「知識（何を知っているか）」から「智慧（何ができるか）」へのパラダイムシフトを説いたが、その実現は「人とよりよくつながる力」の育成にかかっている。

富良野に育つ、知育・情意・健康の三本の木は、めざす学校像として先に述べた、“社会（人）との関わりの中で自己実現を果たす力”を育むために不可欠な要素である。これらを「創造する教育理念」とおさえ、先の「継承する教育理念」に重ねる。

この教育重点目標は、児童の育成に関わる教職員・保護者・地域社会が共有すべきゴールである。

《創造するゴール（教育重点目標）》

イメージワード【一樹之陰（いちじゅのかげ）】

たがいのよさを確かめ合い、生きる力につなげる子どもの育成

～ 自分とつなぐ・仲間とつなぐ・社会とつなぐ ～

○イメージワード **一樹の陰**（いちじゅのかげ）とは：**教育重点目標の根本にある哲学**

あらゆる出会いは偶然ではなく必然であると考え、互いの存在を認め合おうとの意である。

児童・教職員・保護者・地域が互いのよさへの気付きをもち、関わり合っこそ、児童に「生きる力」を育むことが叶うと考える。

○自分とつなぐとは：**学習の達成感を味わわせ、自己肯定感・他者肯定感を育む**

自身のよさに目を向ける体験は、他のよさに気付く原動力となる。

そのために、人とよりよくつながるために、自身のよさや特性への気付きをもたせる。

○仲間とつなぐとは：**自学び合いの充実を通じて己有用感・他者有用感・相互有用感を育む**

互いのよさへの気付きは、一人一人が仲間としてかけがえのない存在であることへの気付きにつながる。

そのために、集団の中で自分のよさを生かしながら共通の目的に向けて協働することや、一人一人の存在の大切さへの気付きを持たせる。

○社会とつなぐとは：**学びを将来に生かす意識を醸成し、生きる力を体得させる。**

学校での学びは、社会とつながり、社会で生かすことができこそ「生きる力」となる。

直近の“社会”である中学校生活の充実を念頭に、確かな学力・心力・体力の体得に繋げる。

小学校学習指導要領解説（総則編）には教育目標設定に関する視点が記されている。このうち、本計画策定の際に重視したのは、「評価可能な具体性を有すること」という点である。

従って、教育目標は、児童の成長の姿からゴールへの到達度を見取ることができるようにするとともに、児童を育む全ての人々が実践のゴールのイメージを共有でき、モラルの向上に繋げられるよう定める必要がある。

このことを踏まえ、教育重点目標のもとに、「ZERO-MARUプラン」と「はぐくみステージ」、および保護者・地域と協働の成果を確かめ合い、次の新たなゴールを見出す学校評価「よりよい学びづくりアンケート」を策定した。

学びの創造

本年度は、以下の「3つの学びの創造」に重点的に取り組む

1 「インクルーシブな学び」の創造

生育・発達上の課題を抱える子が多く集う本校の教育は、信頼できる大人・仲間に囲まれ、一人一人の生来のポテンシャル（潜在する可能性）とレジリエンス（回復力）を引き出す営みである。

特別支援教育とは決して特別なものではなく、“富良野に育つ三本の木”にあまねく降り注ぐ太陽の光のようにあるべきものである。したがって、本校においては、広く個別または集団に対する「支援教育」であるとの共通認識のもと『すべての子どもたちのために』の具現化を図る。

そのために、すべての児童が「鳥沼小学校」という一つの集団に属し、困り感をもった際には、誰でも適時・適切に必要な個別・集団サポートを受けることが保障されるとともに、自分のよさ・互いのよさを確かめ合える学習・生活環境に身を置くことができるよう図る。

2 「子ども自ら“解決”を生む学び」の創造

「主体的に学ぶ」とは自身が学びの創り手となることである。人は自分が深く関わったものに対して自分の分身であると意識するが、この心の動きを「自我関与」という。指導者がファシリテーターとなり、児童が主体的に関わる授業を日常化することにより、児童の心に“学びが好き = 自分が好き、学び合いが好き = 学び合う仲間が好き”という意識が芽生え、深い学びへと誘われるのである。

そのために、不断の研修を通じたユニバーサルデザインラーニングの発想に基づく授業改善と、児童が互いに安心して自我関与できる居心地のよい学級作りを表裏一体と捉え、追究していく。

3 「成長の節目を結ぶ学び」の創造

人の成長に“節目（ターニングポイント）”は重要であるが、“切れ目（ギャップ）”は不要である。幼保・小・中の接続とは、幼児～児童～生徒の成長をリニアに捉え、“切れ目”を“節目”に変える営みを指す。

そのために、これまで行ってきた、市内幼稚園と子ども（園児・児童）レベル・指導者レベルでの接続交流を継続する。体験的を通じて培った相互理解を基盤に、幼保・小・中それぞれの指導ならびに小・中学校各々のスタートカリキュラムの改善・充実に繋げる。



教育重点目標実現のための「実践のゴール」と「手立て」

ZERO-MARUプラン

【ねらい】

これまでの“鳥沼アクションZERO”を発展させ、児童にどのような力を身に付けられたらゴール（教育重点目標）が達成できたと判断できるかを、あたまづくり・まなびづくり・こころづくり・からだづくり・学びの環境作りの視点から「具体的な行動レベル」で示す。

その際、学び合い方、人との関わり方、健康保持については“スキル”とおさえ、具体的な手立てを学ばせ、体得させる。

また、主体的な学び・対話的学び・深い学びづくりに向けた実践は、あたまづくりのみならず、それを下支えするこころづくり・からだづくりの面からも総合的に取り組む。

【内容】

国、北海道、富良野市の施策に則り、ゴール達成に向けたグランドデザインを示し、それを具現化する基本策と組織体制（校務運営組織、学級・学年経営組織）を整えた。



あたま・こころ・からだをスモールステップで育むルートマップ



はぐくみステージ

【ねらい】

ZERO-MARUプランを受け、段階的な指導のゴール（中期・短期）を明らかにし、成果（小さなよい変化）の検証・共有を通じて指導の改善を図る。

【内容】

1年間を中期的目標である3つのステージ（めばえ・わかぎ・みのり）、さらに短期目標である6つのステップに分け、それぞれ「ゴールを達成できた児童の姿」を具体的に見出し、実践検証の視点とした。また、最終ステップでは主な進学先中学校との連携のもと、進学後に求められる資質・能力を明らかにし、教育重点目標「社会につなぐ」の一環とした。



協働の成果を校内外で確かめ合い、次のゴールを見出すリソース



よりよい学びづくりアンケート（学校評価）

【ねらい】

実践の成果を多様な視点（児童～保護者）から包括的に検証し、次の具体的なゴール設定（今後どのような実践ができれば目標に向けた達成度が上がるかを見出す）に繋げ、具体的な経営改善に活かす。

【内容】

児童による評価・指導に関する評価（教職員）・保護者による評価を実施・分析し、学校運営協議会に諮り、到達度・改善点等について年度の総合評価とする。